TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

『フィネガンズ・ウェイク』第3部第3章の概要 (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大島, 由紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/489

Journal of the Tokyo University of Marine Science and Technology, Vol. 10, pp. 87-101, 2014

『フィネガンズ・ウェイク』第 3 部第 3 章の概要（1）

大島　由紀夫*

（Accepted October 18, 2013）

The Epitome of James Joyce's *Finnegans Wake* Ⅲ．3 (1)

Yukio OSHIMA*

Abstract: I translated into Japanese James Joyce's *Finnegans Wake* III, 3 (p.474 l.1 ～ p.501 l.6). In some parts I translated it word for word, but in other parts I just gave the gist of the sentences or the paragraphs. So in naming the title I used the word 'epitome,' not 'translation.' The epitome mainly treats Four Masters' inquisition on Yaun.

Key words: *Finnegans Wake* Part III, 3 epitome

低く長い嘆きの声が聞こえてきた。純真無垢なヨーンが沈んでいるかのように横たわっていた。暮れゆく風景のなか、小丘の原っぱで、郵便の袋を脇に置き、ブライアの木でできた従来の形の淡黄色の杖のそばで、腕をたらし無心に眠って横たわっていた。彼の寝言はもちろん終わっていたが、荒唐無稽な夢のドラマは実際まだ終わっていなかった。短時間のうちにたっぷりとなった輝く頭髪を、ヘアバンドで結わえることなく豊かに波立たせ、その当惑を表すまぶたに夢の終わりが近いことを窺わせながら、この上なく悲しげに（しかし読者諸君、非常にうまく感情を表現して！）嘆いていた。口の開いた端から寝息が漏れていたが、金で買えるもののなかで最も高価な､3 倍甘い糖蜜やライチを使った食品を口にした時に感じるような物憂さをもった音であった。ヨーンは半ば意識を失って､嘆きつつ横たわっていた。そして（なるほどね！）耳を貫くほどに甘い蜜のような優しい言葉も（ヤレヤレ！)、何の役に立つのだろうか！　無邪気な天使のようなまるまる太った愛らしい少年の、ブラシ天でできたクッションのような尻に、とがっていないピンを手に取って刺し、眠りを確かめても何の役に立つのだろうか。

この時、サイレンが、家の火事を消えないままにしておくような軽装備の消防隊を連れて来るように、その軽やかな寝息の呼び声により、3 着 の 祭服を着た 3 人の王と 1 人の戴冠授与者が、内陸東部の西端の主要な地域から、ブロスナ川沿いのハリエニシダの生い茂った琥珀色の道を通って彼のもとにやってきた。4 人の老人は、自分たちを高めるために、夜明けの最初のかすかな薄明かりが到来しないうちにやってきたのだ。彼らは山のようなモグラ塚を跳び越え、記憶する価値もない過ぎ去った昔日の地域を横切って来た。何らかの口実をこしらえ、［475］夜霧の水滴にたっぷりと濡れながらやってきたのだ。恐れよ！　恐れよ！！　恐れよ！！！　恐れよ！！！！　恐れよ！！！！！　恐れよ！！！！！！　畏敬の念に駆られた彼らは、標識のない十字路で、彼の体の厚みはともかくも、彼の体の縦横の長さはどれほどなのか．．．　何平方ヤードもあって、体の半分がコノハトと同じくらいで、しかし全体となるとオーエンの 4 分の 5 にもなるのではないか、と考えていた。自分たちが見つけるまで、花壇の上で、彼自身の光を忘れさせてしまう眠りの花ラッパスイセンの中で大の字に、足かせをはめられたように横たわっているのであろう。そして庭を覆い尽くす草花とともにワルツを踊る快楽主義者であり、掟を厳格に遵守する若枝が向かう先の野生のジャガイモが、垣根となって彼の頭上で舞っているであろう。恐れよ！！　彼の隕石のように堅い歯、しみのない虹色の果皮となっている彼の肌。恐れよ！！！！　絶え間なく鼓動する臍のある曇りのない彼の腹。恐れよ！！！！！！　そして黒ザクロ石の硫黄を吹き出している彼の血管、カスタードクリーム色の彗星のような彼の髪、そして小惑星たる関節や肋骨や器官。恐れよ！！！！！！！　電気を帯びた鞍ヒモのようにねじれた内臓一帯。

これら 4 人の聖職者は、実行を誓った独断偏向的な問いかけを、彼に対して行おうと一緒になって丘を登った。というのも、彼は彼らの会う目的だったからだ。彼ら自身についての見方をもたらすものだったからだ。いかなる女もその国家を体現化しているのに加え、あらゆる者を彼が体現化していたからだ。彼らのこの日の真夜中は、彼の朝 2 日分に相当していた。丘の尾根まではマランガーの教区で太陽の休み場である草原になっており、それは遠くまで広がっていることはなかった。まずグレゴリー老が時代に覆われた奥深い草地に残っている足跡を求めつつ登った。次にライアン老が、点々とうねって続く彼の足跡をたどった（自分の足のまめを見ると、何かしら以前自分がここに来た

* Department of Maritime Systems Engineering, Division of Marine Technology, Graduate School, Tokyo University of Marine Science and Technology, 2-1-6 Etchujima, Koto-ku, Tokyo 135-8533, Japan （東京海洋大学大学院海洋工学系海事システム工学部門）

ことがあるように、道中ずっと彼には思われた)。次に尊敬すべきこの善良な人物の後を記録係のターペイ老博士が、アニスの実を夢中になって食べながら、飛び跳ねるように追いかけた。そして健脚のマクドガル老が彼の激励者としての立場から、急ぎ足でしんがりを務め一団をまとめていた。彼はロープで、空色がかった灰色の、大地を早足で進む彼らのロバを引いていた。彼は一回考え直した後でこのロバを引いていくことにしたのであり、そしてまた決して酔ってなどいず、ロバがよろめくほどに、どの種類も一様に大量の若芽を【このロバに食べさせるために】自分の背中に負って運んでいた。彼は右足、左足と、キャベツ畑の山羊のように、糊で張りついたように進む大柄のロバの 4 本足のそば、このマスコットであるロバのいななきの聞こえるところにいて、ハープのような大気の音を、[476] 野生生活のように荒々しい角笛の音を、不幸を告げると言われているモッキングバードの鳴き声を、風に向かって飛ぶナイチンゲールのさえずりを、補聴器の助けを借りることなく耳にしていた。

長である歩き手、代父の代理者であり、神の子の名付け親であるマシューは、この時皆が口論しているなか、重い足取りで歩いていた。彼がいたところは、ユーイスニーチの丘陵から風上に数パーチのところであったが、まさにここで一人離れ、天空で催眠術師としての手を伸ばし、そしてその手は皆を鎮めたのであった。風下にいた威張り坊たちは、どこであれいるべき場所が見つかったところで立ち止まり、彼から距離を置き、彼に従い、プロスペクト墓地の見学者のように、彼らの堅い頭の上のフェルト帽をとって掲げ、うなずき、身をたわめ、お辞儀をし、挨拶をした。彼の罠にかかった囚人にかかわる調査結果を得ようとしていたこの巡回裁判官たちはそうしたのだ。結局、心に傷と悪魔性と悪意とロバのひずめの音をもちながら、賢人であり愚かな魂の持ち主である彼らは、この一行の追加の仲間であり、頼もしき存在であり、人参とは無縁の、彼らのそばにいるこの動物を排除することもなく、最も優秀な 4 人の速記者になった。そしてそこには、なんと、この 4 人の向かいに、誰あろうヨーンが横たわっていた！　彼は手足を思い切りのばし、ケシの花の中に横たわっていた。親愛なる書き手としてこれ以上のことを言うならば、あなた方読者も十分に察しているかもしれないが、彼はぐっすり眠っていたのだ。そしてはるかそれ以上に、まばゆい美に囲まれながら、この気取り屋は、何よりも太守に似た姿でそこに横たわっていた。また私の知っている限りのことについて言えば、信仰や教義の中に出てくる自分の好きな星座中の動物について説いたルーカス卿のように、星となっている動物たちを愛玩している老マシュー・グレゴリー、更にマーカス・ライアンズ、ルーカス・メトカーフ・ターペイ、そして、彼の後ろに潜んでいるロバを容赦なく扱った、ロバのジョニーことマックがそこにいたのだ。

彼らママルージョは皆優れた五官をもっていたけれども、彼の立方体の寝台のそばにかがみ込んだ時、この香気を発散する者たちは、そうした五官も働かないほどに彼に魅せられ、自分たちのかかとと椅子の区別もうまくできない様子であったと言えるだろう。そしてこの時、問いを投げかける時間が近づきつつあった。探究心をもち、彼に見とれていた彼らの魂の各領域は、4 分割の範囲内で、コマ回しや、輪投げや、凧や、ビー玉のような遊戯をする時のように高鳴り安堵した。というのも、彼は息を確かにしており、その息は水分を含んだ疑似の霊気となって、次から次へと柔らかな寝息となって続いていたからだ。[477] 彼に対して 4 博士が 4 方向から口に出し始めたことは、最初に彼がどのような状態にあるかということであった。

―― 彼は死にそうだ、このいたいけな子供は。ヨーンはこれまで生きてきたのに。

―― そうだね、なぜだろう、我がリーダーよ。

―― 実際は、彼は酔っているか何かではないか、我が子は。

―― あるいは丘のネッドが言うには、彼の息は異なる割れ目から出ているそうだ【放屁のこと】。

―― 聞けよ、オイ！

―― なぜそうなんだか言ってみてくれよ、聞いているのか、オイ。

―― あるいは誰かの葬式のリハーサルをしているのだ。

―― そのようなことは言うなよ！　馬鹿めが！

そして 8 本の足を踏みしめながら彼らが流し網を幅広く広げる時のように、そのかすかに光る有色のまがい物でない引き網を広げる時のように、彼ら 4 人の博士の間から一つに合わさった言葉が柔らかく発せられた。

―― 仕事に取りかかろう、君！

―― サア、元気で行こう！

―― 今は幸先がいいぞ！

―― この坊やは引き受けた！

注意深い聞き手よ、彼らがこう言うのも、彼らは心の中で長い間青の斑点模様のある、性能の良い、収納可能な網、ナンセンが使ったような網を、四辺形に広げようとしていたからだ。年長のマシューから次の位の秘儀伝授者【マーカス】に至るまで、彼から彼に近い者【ルーカス】に至るまで、そのようにして年下のロバの世話係【マック】と彼の十字架奉侍者【ロバ】の尾に至るまでそうしたのだった。そして『白雪姫』の絵本の昔から幾年月、心の中で彼らは、彼がまわりにプランクトンを漂わせ、銀色の鱗をふるわせ、きわめて明るい金色の色合いを帯びて水を跳ね返らせながら網の方に上がってきた時、その網をかけようとしたのだ。ヨーンはその混乱すべき時、調子良く二枚舌を使い、曖昧に言葉をぼかしながら口を開くであろう。唇を開いて不明瞭な声を出すであろう。それは上品な逃げ方であろう。そしてその時の彼の口の様態は、荒れ地で取れる没薬（もつやく）と、溶けたおぼろげな月が一体になってその中に入ったような様態であろう。

── ヨーンか？

── 目の前にいますよ！

── これは、これは！　お前の答えは何と感じがいいのだろう！　この後どこに行くのか。ライオンの臭いのする土地にか。

── 各々方！　かまわなければ最初の問いかけだ。お前たちが代々いた場所を言ってくれ。

── ここと同じ前史からの古墳、オレンジ栽培室です。

──［478］なるほど。大いに結構だ。オレンジ栽培室にお前は手紙を置いてあるのだな。私の言っていることが聞こえるか。

── よく聞こえます。私の愛するティペットのおかげで。

── ずっと前から聞こえるか。前よりもよく聞こえるか。

── 前よりもずっとよく聞こえます。神がお遣わしになった者のおかげで。私の最愛の者のおかげで。

── さて、本題に近づこう。次のことに関して疑わしい点を挙げるので聞いてもらいたい。次の事柄がある。我々の解釈者ハナー・エサラスから、東方三博士が使うような言葉でありながら、お前の汚い言葉の中には 606 ものくずのような語が入っていると聞いているのだ。その言葉は、一つ一つの言葉が韻を踏んでいるし、基本的に大物になれる要素を確かに窺わせているのだが、大いに学んだことを示す文書の中のすべての発音されうる言葉に、一時的にすら威厳を感じさせるものが一つもないというのだ。ラエティア街道も出てこないし、タルクウィン小路も出てこない。エレウシス街道もアウレリアヌス門も出てこない。ズンケン道も、草むらに覆われた道を行く牛車の旅も見られない。犯罪の支配する難所の道もないし、荒野の雌鳥の叫び声も月夜に出歩く人たちのための歩き板もない。これら天国での希望に通ずるものがそこにはないというのだ。こうした情報源は確かなものなのか、ヨーンよ！　率直に言ってくれ。詳しく説明してくれればくれるほど、私にとって分かりにくくはなるが。

── どうしてなんですか、フランス語で話すと発音しにくくなり、吃ってしまうのは。田舎者のあなたの口の中には水分がないんですね。僕は天国での希望とかやらには関心はありますが、僕には行動の自由というものがあるんです。そんなものには価値は一つもありませんよ、フン！

── 何だって！　フン、価値が一つもないだと！　頭がどこにあるのか。よくもこんなに小賢しくメシアについて関心をもったり話したりできるな。つまらないことを言うのはよせ！　何様のつもりだ！

── 僕はトリスタンでもあり、パトリックでもあり、神からの授かり者でもあるのです。彼女ティペットを見なかったですかね、触ってかわいい僕の女を。アア！

── お前は孤独なるパトリック神父の精神の中にあるのか。

── 同一人物ですよ。三人のね。僕の唯一の女を見ませんでしたかね。何か非常に寒いな！

── 山以上に崇高な賢人さんよ、何を猟犬のように震えているのかね。接触恐怖症で悪寒がするのかね。それとも妖精のような保母さんが欲しいのかね。

── フォクルトの森よ！　アア、我が祖先たちよ！【アイルランドに戻ってきた聖パトリックの言葉の一部】

── 暫くの間静かにしていたまえ、野ガモ君！　カモが舞い上がり、あのじっとしている千鳥の目を覚まさせてしまう。私は誰よりもその場所のことを知っている。［479］私はあの永遠の若さの土地ティア・ナン・オーグレに住んでいた祖母のところへいつも行っていたが、確かに 4 日目になるとそこに行った。祖母の家は西部のメイヨーの中かその周辺にある小さな灰色の家で、あの時は胴長の犬が舌を出して土地境を歩き、革ひもを引っ張っていた。三文で買えるべっ甲のようだった。アア、ベンバーブ！　ベンバーブ！　ベンバーブ！　「カーローまでついてきて」【歌の名前】といった気分だ。あそこはクレア産の牡蠣の地コンウェイ州ポルディだ。西風の吹くあの地で、別の物語の中にいるように、どんなに豊かな生活を送っていたのか、あの時は全く分からなかった。言うに言われぬ尻尾をもった私の通訳、ロバのミード・マーベルをつれて岸をよく散歩した。私の遠い親類のジャスパー・ドゥーガル氏を知っているかね。「山の碇」を営んでいる、牧師の息子、大酒樽のジャスパー氏を、パット某君。

── 実によく知っていますよ。フォクルトの狼氏のことですね！　このことで僕を呼び出しているのですか？僕を 2 匹の狼の前に投げ出さないで下さいね！

── トルコの猛女のことだな！　よく言い得ている！　まぎれもない狼だ！

── ちょっと待ってくれ。君の戯言の要点を短く言うなら、侵略は侵略をもたらすということだな。死者の埋葬や、憂鬱症の緩和や、厄介事の遂行をどこで、どのように、いつ行うのがベストなのか、物事の前兆から予言するのは鴫だ。しかし、君は雌ギツネを追うのを予測するのに南風を使うことを主張する。それゆえ私はこの青い干潟に鵜を送って鳥占いをすることにしよう。どうか教えてくれ。お前はかなり以前に、この小丘、いや塚について私の学者の友人に少しばかり話をしたことがあった。お前なら呪いの塚と呼ぶであろう塚が存在する以前には、埋葬船【バイキングは死者を船に乗せて埋葬した】という何百万年もの間続いた船があったことをお前に言っておこう。どちらかと言えば、粗末なはしごにとりつけられた旗竿ががたがた動く、きれいな帆のこの船の方がいいので、これに私を乗せて送り出してくれないか。そうしてくれ。こうしたすばらしい船を手に入れるにあたって、それがどんな船だか分かっているだろうか。ウェブスター辞典によれば、それは決して戻ってくることはなかった 4 本マストの小舟、某所行きの「プクゥ・パ号」だ。いいか、そのフランスの船はオレンジ色の船だったのだ。奴は船なのだ。ほらそこにある。そこにあるあの二艘が両方ともに奴らなのだ！　デー

ン人の印のついたドレーク【HCE の属性をもつ】さ。その船を略奪したのか、それとも壊してしまったのか。どうなのか！ 【この HCE が乗っている】ヘニュウ船【古代エジプトの『死者の書』の中に出てくる船】！ それについてはっきり語ってくれ。

── 僕たちは病床から葬式に、そして墓から石塚に行き着くのです。廃墟を訪れ石室墓をご覧なさい。【死を告げるドレークの、すなわち HCE の】角笛が聞こえてくると、誰もいなくなります。水夫に会ってご覧なさい。【ドレークの、すなわち HCE が来るということで】S.O.S. の信号を発します。必ずそうなります！ ［480］その国【HCE が生まれた国】を知っていますか。ノルウェーですよ。奴隷を表すカラスの旗を掲げていました。僕は地上の創造主である神、神の子、そして信頼すべき人間たちの存在を信じます。身をかがめなさい、あなた方 3 羽の鳩たちよ。サア、黄褐色の服を着たあの少女に呼びかけなさい【「青いドレスのあの少女の目を覚ませ」という歌の名前のもじり】！ 猟犬たる狼【HCE のこと】を呼びなさい！ 海の狼を。狼を！ 狼を！

── 大変よろしい。その民間伝承はこのロバの口から直接聞いている。天気が許せば母船に乗って、持ち場であるこの緑の丘から離れ遠くに行くとしよう。造船職人に誠意を尽くすため、この西部の東部にある塚へ真夜中に来るようにアイアトン【クロムウェルの二の腕】に言われている。デーン人の土地からその大きな丸い目をした男も船で出立した。私の言っていることを心して聞いてくれよ。

── マグナス・スペードビアド【鋤形のあごひげの意味。HCE のこと】のことですね。十字架への反逆者であり、二心ある持ち逃げ犯人です。我々の休息所の破壊者です。奴は忌まわしい柄杓でもって僕に向かって十字架を切ったのです。自分の乳首を露にし、僕に乳を吸わせ僕を吸い取ろうとしたのです。神聖なるこのキリスト教徒 HCE を見てやってください！

── ああ、あの殺虫剤野郎！と毒を盛られた奴がうまいことを言っている。大風呂敷一世だ。海軍の肥だめにいた密造酒製造おじさんだ。

── おいっち、に、と【歩く時のかけ声】！ ハロー、懐かしきベイリーのビル君！ その人物は誰なんだい。そいつは誰なんだい。なぜおっぱいが出てくるんだい。

── 東国のヒーロー、無鉄砲なガキ、叔父の HCE のことです。あのことで彼にはチャンスがなくなったんです。ダブリンではね。十分彼のことは心に留めておいてください。

── おい！ お前、お前は自分自身の内臓を食べた夢を見たことがあるか。あの首の曲がった狐【HCE のこと】と自分とを結びつける夢を見たことがあるか。

── 言いたいことは分かった。我々は動物の物語の中に入ったのだ。アナグマとか豹とかね！ お前が言おうとしていたことを先に言ってしまった。鬼のような継父に子供は恐怖を感じる。我々を取り囲む丘の雲、HCE のことだ！ つまりお前の言いたいことは、狐君、お前がどうしたら狼のように吠えられるかを学んでいる一方で、臆病者として、そうした恐怖を感じる時と同じくらいいくじのない学校生活を送っていたということだな。盗人君！ 盗人君！ 最善を尽くしたまえ。

── まさに一生懸命礼儀正しく最善を尽くしていますよ。狼の子供が僕の後を追っていますからね。狼が。この群れ全体がね。狼全体が、狼、狼、そして狼、狼が彼らの方に向かって。ロビンソンズ・シールド【ダブリンのブローカー、輸送、貿易を営んでいた会社】のために。

── 聖人と福音書に頼りなさい。この動物は再び吠える。このフィンガルからの侵略者を捜し出せ！ 私がここで結核で死ぬまで、私の偽賢者としての立場を保ってくれ！

── 何だって？ウルフガング【ゲーテのこと】だって？誰なんだい！ きわめてゆっくりしゃべってくれ。

── ［481］**彼を異教徒としてたたえよ、聖なる石で彼を癒せ！ 彼は狩をする者、再来する者、取り替え子 . . . 最終的に大地と同じくらいの年齢の者** . . .

── 男根硬化症め！ こいつは、蜘蛛も巣を張らないこのアイルランドにいた、そしてまた船がシップ通りを行き来していた頃より前の世界紀元に存在していた。汝はトーテムポールなり、的お前の祖先だったのか。紀元前に！

── あれは夢だったんです。ある日寝ていたんです。ある日のことについての夢を見ましてね。目を覚ました日についての夢を。アア、その時この夢の中で、あの男は僕の心を恐怖で満たしたのかもしれません。罪に満たされてしまったんです、何と、罪まみれになってしまったんですよ！ 恐ろしい！ 本当に恐ろしい！ どうか恐れて下さいな。

── 私はお前が書いた三行連句を持っている。この詩では、同じことが三度違った風に繰り返し描かれている（彼についての非常にくだらない話もある）。抽象的な内容から具体的な内容に移っていき、フェニアンとしての人類史上まれに見る野獣的な、海洋的人物と呼ばれたフィンから、流れる溶岩のように怒り、とりとめのない低いうめき声をたてる、お前の「ミスター・高貴な朝のダブリン」としての、朝早くから酔った反抗的な父親としての彼までが描かれてある。彼は昔のロームルスとレムスのように、その都市の中でその州の中で、時を違えずに復活するであろう。そしてダブリンという都市のために、その都市によって、その都市とともに、その都市から、彼が有用な面をもつと同様、他の者とは異なる面をもつ崇高な山であることをお前は確信するであろう！ 我々が語っているのは、父である神、神が有する父！ 父親！【としての HCE】なのだ。

── 我らの父、聖なる父は、チヴィタ、アイ、スミスウィック、ロンダ、ケイルドン、セイラム（マサチューセッツ州）、チャイルダーズ、アーゴス、ドゥースレスといった居住地で、自分の人生の方針をやり抜こうとしていました。そう、それにもかかわらず、ある意味で彼は僕と性質がどれも似ていて、こう言えばいいと思うのですが、アブラハ

ムであると同時にグラウバー【ジョイスの友人】でもあると誰かに言われたのです！　あのことは父親である彼によってなされ、僕によって恥辱、恥辱！へと行き着いたのであり、これからもそうなっているでしょう。残念ながらここダブリンでは、つまずいてしまうくらいに低い壁でも、あなたが今ご自分でその向こうに孫のような大きさの昔の石一つ持ち上げ投げることも、競馬のクラシックレースが行われる 10 月の夜まで無理でしょうが、でもたとえ投げてもそうした石は、障害物レースであれ平地のレースであれ、また繰り返し賭けないのであれ、その体に合った色合いの服を着たある競馬狂の背中に当たってはねかえってしまうことでしょう。それは曾祖父の 2 代前の人物で、トミー・テラコッタという名前で、僕が恐れている男です。この人物はあなたの父親にも僕の父親にもなり得る人物で、ラネラ【ダブリンの 1 地区】のプリンスの 4 代前の父親の兄なのです。そうだったのです！　実際そうだったんです！　父【HCE】と子（僕が子だったんです。というのも、オックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジか、［482］父と子と聖霊を意味するエディー・クリスティー・オックスフォード・ユニヴァーシティーのクライスト・チャーチ・カレッジで、僕とタン・タワーは酔ってこのことを認めてしまったのですから）と聖霊【HCE とヨーンの祖先】はつながっていくのです。

―― 穏やかなそよ風が吹いている。【そよ風に乗って広まる噂話を聞いた】耳は金だ。その耳の持ち主の名前は何というのか。

―― 僕の父親にはオライリーがいるのです。パーシーですよ。パーシー、パーシー、パーシーね！

―― 白いまつげをつけ、聖パトリックのように絶叫する奴のことだな！　偉大なる豚パーシー・オライリーか！　しかし、坊や、我々はどこで【この山を】下りるんだい？

―― 停留所です、ルーカンとダブリンの！　ゴホ！　ゴホ！　ゴホ！　ゴホ！

―― アトランティック・シティーのマクドガル君よ、そしてまた口の中でくしゃくしゃ噛み、咳をしている彼のロバ君よ。君の十字架の末裔であるメイヨーのヨハネの言うことから判断して、また君が日本の横浜で買った帽子のアクセサリーによって、かろうじて君が君だと分かるのだ。君がアイルランドの西海岸で知った胆力の持ち主オマルコンリーは偉大な支配者グルーリウィッド【アーサー王の門番】のような人物だが、君にとってはまるっきり役には立たない。私のドン・キホーテ、ジョニー君、翼を広げた君の鷲の表象は 4 番目と定められており、【その立場から】務めを果たしたまえ。

―― 我々の原罪とエデンの園の話題に話を戻そう。君は霊魂について執筆したケヴィンという若い学徒、すなわち、（他の人たちも話題にすることだが）ハイ通りにいるポストホルン吹きのエヴァン・ヴォーン【ダブリンの初代の郵便局長】という人物【ショーンの人格をもつ】を知っているかね。この人物は、いいかね、それなりの者が読んでもびっくりするほど判読しがたい記録書類第 1 号を見つけたホロホロチョウたる雌鳥を撃ち殺したのだ。

―― 聖人の叡智を私が知っているかだと？時々彼は祈祷しているかのように数分間黙りこくったり、頭を抱え込んだりしていた。こうしている間彼は密かに心の中で考えごとをして、彼に話しかけたり、不審を買うようなことを彼に言う奴らがいても相手にしなかった。しかし私は君をボートの整調手としても全然必要としていない。君のてきぱきとした指導など必要としていない。マシュー・アーノルド君、君はあまりにも遠い北方からやって来た渡り鳥だ。だから君は南に行くべきだ。

―― なるほど南ね。君は忠誠心の豊かなアルスター北部にいるが、私は自由なアジア南部にいる。こっちの方がずっといい。運命を厭う彼は信仰による心の治療を受けている。そこで書きものをするであろうその人物は、究極的に詩人でありさらには学者でもあるのだが、彼は元来そこで読むことの価値を発見しているのだ。彼が読んだのは、『ケルズの書』が多くの対立する語を用いながら目下のところ到達している終末論の要だ。目でとらえられないものをもし耳がとらえるならば、コード化できないものも解読できる。この教義が手に入った今、我々は結果をもたらし物事を引き起こす原因を手にし、［483］また、別の結果を再びもたらすこともある結果を手にしている。すなわち、私はペンマン【シェム】の話を、郵便屋の話にふさわしくなるようにあえてひねりを加えて語ってみよう。この話の内容はショームについての内容であるが、書いたのはシェイムスの手だ。ション ―― シム ―― シュング、という具合か。似非ケヴィンについては強い疑念があり、【彼のことを考えると】子供時代の空想に耽るお前のことを我々は皆思い出す。この疑念は彼および、私とお前との間にいる人物に対する不平不満に彩りを添える醜聞の咆哮である。彼は二人のトルコ人に説教を行い、インド人全員に洗礼を施した。この修道院の尊師はね。そして青銅器時代に存在していた全員に前期復活主義という好ましい考え方を与え、帽子職人のボルサリーノ家の者たちにイースターの際の復活を信じさせた。彼は確固とした我々の聖人だ。さて、お前は 4 博士による赤ミサが終わった後、心の中に彼についての道理にかなった躊躇をもったかい？それとも彼についての信念の持ち場を離れることはないかね。すぐさま私に言ってくれ、どうだ、すぐに！

―― 過度の要求にはいらいらしますね！　だめですね！　絶対！　気軽に使うこうした衝動的な【ペンマンという】言葉が僕を傷つけるのです！　あなたにはもっと向こうに行ってもらいたいですね、おべっか遣いのマルカンティノさん！　あんな恥知らずが僕に対して何が言えるというのですか。奴のことをどう扱わなければならないというのですか。僕たちは子宮にいた時から仲違いしていたのです。初めから互いにそっくりだったエサウとヤコブのようなもの

だったんです。あの ALP のくちばしから出てきた不浄の輩とはね。最初から、あの乳児、僕のずるい兄、うぶなる者、たった 15 回しか春を迎えていないあの無邪気な者とはね。姿勢をよくし、健康で、物知りで、善良になるための、ルカやマルコに彩られた 15 年間の真の学校生活の中で、僕が彼を派手っけで内向きの太った豚に変えたとでも言うのですか。僕は幼稚園にいるのでしょうか。僕の高まる心よ、僕には分からない。思うに、僕の生の源であり、この空と地と水の中に居住したまま留まっている今の僕という現れの元となったあの父は、僕が心を入れ替えて巡礼を受け入れ、すばらしいことに髪を切り、失敗を最小限に抑えて敬虔な動機から衣服を片付けたりするなど、年長者に従い、双子の兄と結びつく習慣を受け入れた時に、僕が聖職志願者となって、子供時代の自分よりも 3 倍大きな自分となる未来をもつように変化したことを知ったと、この天の下の住民から外れ、ついには神と対照をなした僕は確信したのです！　僕はこの身（不快な愚か者の繭である僕）を慎ましやかに低くかがめ、生気のない、真の、卑しい、大便のような過去を芬々と臭わせつつ、［484］あなた方の足下に跪き、手振りを交えずに話し、彼の前で柔和な気持ちで、会衆者として自分の心の傷にひれ伏し、涙の粒を目に浮かべながら、自分（僕がその中に存在する人物）が何をしなかったのか、言うならば彼がどのようにしようとしたのか、加えて、彼がどのように使命を果たそうとしていたのか、加えて、これらのことが何を物語っているのか、告白しようとしているのです。それなのに僕の 6 番目に大事な友であるあなた方、何故いつも進んで僕を助けてやるとおっしゃったのですか。第 1 級の民族主義者でありよぼよぼの、誰にでも抱きつく私生児の、あの大声の持ち主であるあのハンフリーが、自分の部屋で夜、あのような立場になることを画策していたというのに。横取り屋で演出家の聖ママルージョさん、あなた方は人を鼻であしらいながら、人の心を動かすような行動をとることなく、ほかの洗礼志願者を恐れおののかせ、言いたいことを言い、署名に【余計なことを】書き添えます。というのも、日陰者として身を隠しながら、僕が偽善的で、高慢で、本心を偽り、他者と絶縁し、もはやアイルランド人として終わりを迎えることはないが故に、あなた方は僕の死亡記念日を祝おうとしているからです。さあ、あなた方の忌まわしいほほを、人々の目の前で打って下さい。多くの人がそうしているからです。僕は慎ましやかに、一時の場合に備えて晩祷のし方を正した方がいいのでしょう。僕のポケットには、人、ライオン、牛、鷲など、平信徒がこしらえた枢機卿であるあなた方のエンブレムが詰まっています！　あるまじきことです！　僕はあなた方を魔女の目の前で彼女たちから救ったのに、あなた方は物柔らかい悪魔の後ろに隠れて僕を古臭いダブリンの地へと解き放ちました。皆さん、時宜を得て、僕はあなた方にローマ教皇遣外使節のイロハやモットーについて教えてあげたのに、あなた方パトリック以前の司教たちは、僕を隅々まで調査し、取り囲み、屈服させました。僕はあなた方を贅沢三昧から抜け出させたのに、あなた方は狼のように僕の言い間違いを記憶していました。この僕を！　まさに僕を！　誰あろうこの僕を！　心に毒が入っている！　あの時のあのことを考えて下さい！　恭しくも甘んじて屈辱を受けたことを覚えています。僕の司教地方代理という職位はあなた方巡礼者よりも一段上なのに。このまま留まりたい。僕の世代の者が書いた書物を読んで下さい。地上の大気のような僕の師テオフラストスは、精神は上の世界からやってくると書きませんでしたかね。僕はプレストファー・パレンブスとかポルウス・パッリオとともに、衆愚政治の中にいるんですよ。預け入れ客である財布のお寒いディリー相手の鑑定家ケリー・テリー【実在の質屋】とともに。サア、どれでもいいからあなた方お気に入りの、僕に押された牢の焼き印を見てください。くっきりと押してあるその一連の文句の複写は、ガルス教皇とマクヌス教皇が外国語で書いた、エヘン、英国風に、「ただの木からはメルクリウスの像は創れない」というものです。［485］気品ある 3 本の羽飾りが付いていて、裾に僕のモットー「私は仕える」と記されてある ── このモットーを、ガスペイとオットとサワーは「私は耐え忍ぶ」に書き変えてしまう ──、ローマ・カトリック教徒が着る紋章つきのモーニングコートを着られなくするものを、司祭といえどもほめたたえることなどできません。僕はあなた方が差し出す聖体用パンを食べようかよそうか考えています。そしてまた、僕の名前が、神の定める僕の審判の日にあなた方が最初に耳にするであろう個人名なのです。さようなら！

あるいはドイツ語では、一杯飲もう、ということになりますが。

── お前自身、サトウキビの汁でも吸っていろ！　いいか、私たちがお前の痛々しい足を見たがっているとか、口を開いた辛くて酸っぱい！お前の釣った魚を味わってみたいとか思っているとお前は考えているのだな！　6 ペンス銅貨でも握っていろ！　ありがたいと思え！　父親が生んだごろつきとも、母親が生んだ不良仲間とも言えぬ奴め！赤薔薇のランカスター家にも白薔薇のヨーク家にもくっつく奴め！　私たちが英語をしゃべっているのか、お前がドイツ語をしゃべっているのか。オヤオヤ、どこに行ったらいいかまだ分からないのかね。いつ、何をしたらよいかということはきわめて厄介な問題なのかね。まだ分からないかね。大変なへそ曲がりで、いじめ役の情け容赦のない女のことに話を戻せ！　喧嘩っ早い父親の話へと私と一緒に突き進め！　ずっと長い間 3 本毛であった親父のことをどう思ってきたのか言ってごらん、エッ。あの男の最愛の女をどう思うのかね、ミスター修道士さん、エッ、エッ、主の力で私の心に息を吹き込みたまえ。神よ、どうか私を助けたまえ。うら若きポリー・ピーチャム【『乞食のオペラ』中の登場人物】の恋人である特権階級のジェンキンス・エアのハサミムシ殿【HCE のこと。また英国・スペイン戦争

をジェンキンス耳戦争ともいう】、及び彼の言葉に従い世界に音が生まれる前に奴に電話をかけた奴の女【ALP】にはどのような価値があるというのかね、エッ、エッ、エッ。奴の第一の友や、海を渡って奴の元を訪れた者はどれほど偉い人物なのかね。あののろまめ！　ただ一軒の家畜小屋の中でロバとして生まれたほら吹きめ！　主も奴には呪いをかけている！　私たちが外についている耳で、朝飯から夕飯までの間、奴のドラムやボーンズや低音のハミングとともに奴の言葉をそれぞれ異なった風に聞くのと同じように、お前が外についている耳で奴の言うことを聞いたとしても、お前の心の耳は奴のことが分からないだろう。奴を吊るしてしまえ！　そうすれば私は乾杯という訳だ！

―― これ以上怒らないで下さい、と、ヨーンの舌は言った。すばらしい医療の達人のルーカスさん【ルカは医者】、どうか。根本的な見方をひどいものにしないで下さい。最高の優れた偉大な名医さん。僕の愚かな賢者【HCE】は態度を改める時もあるのです。どうか、散歩好きのルーカス先生！　僕の母は神聖な女性、とてもすばらしい女性なのです。ヤレヤレ、彼女は僕を足が不自由になるくらいに引っ張り回すのですがね。その彼女の男がこの男です。全くもってボヘミア的なつましい生活を送っています。

―― HCE が孔子とその弟子だって！　とんでもない！

奴は中国人の日本人とのやりとりをチェックする郵便業界の聖職者ではない。［486］お前のラム肉のような父親の顛末についての悲しい話はその辺でやめてもらいたいね！

お前は 432 年のカトリック教徒だろう？

―― **パトリックは僕のくびきであり、**
3 倍信頼している人物であり、
最終的に僕の父である。

―― 歴史は歴史として奏でられるものだ。老いた女が歌を歌う時のゆっくりとした調子で。トリスタンやパトリックや逢い引きや別れのことを二重母音で。アア、ドラゴン君、私の感じるに、お前の手もその気を見せてはいたが、お前の興ざめな口はしゃべりすぎた。舌が言語化したものを言葉が突き進ませている。単なる人間の身振りがいい。神も冗談を言う。古い秩序は変化しつつ、最初の秩序のように続いていくのだ。男は三人に一人が良心に亀裂が入っているし、女は二人に一人が心の中に冷やかしの気持ちをもっている。さて、私から見ればちっぽけな人間であるミニュシアス・マンドレークの話に焦点を合わせてくれ。そして私のちっぽけな中国風の心理学をたどっていってくれ、俗語まじりの貧乏人君。さて、すべての主である私は、少しの間お前のこめかみに翡翠でできた埋葬用の頭文字 T 定規を真直ぐに当ててやろう。何か見えるかね、テンプル騎士団員殿。

―― 黒人のフランス人のペーストリー焼き職人が見えます…　頭に乗せています…　格好のいい山高帽ですね、彼の…　オヤマア、誰かにそっくりですね。

―― 敬虔な、敬虔な人物にだ。いかなる憂愁の音が私の耳を打つのか。同じこの子羊の頭を飲み込んだ蛇【の形の T 定規】を水平に置き、それを軽くお前の唇に少しばかり当ててやろう。どう感じるかね、愛らしい唇君。

―― 麗しき女性が…　金色の髪をベッドの上に流し…白い腕を星々に向けながら…　ゼラチン状の静かな水の流れに浮かんでいるのが感じられます…　オー、ラ、ラ！

―― 純粋な意味で無邪気な奴だな。アア、ただただスウィフトのようになれ。といっても無駄な試みだろうが！　今日婚約して明日別れるようなものだ。お前の 3 つの部分から成る頭文字を逆さまにして、手斧をお前のベルトにつけ、しっかりとお前の胸につけてやろう。何が聞こえるかね、胸当て君。

―― ドアの後ろで、バッタが一匹、ふすま飼料のたまっているところで足をばたばたさせているのが聞こえます。

―― 恋をする女のように振る舞うことは結構なことだ。そしてそうやって三連祭壇画のような幻想は過ぎ去っていく。山腹から山腹へと。美しい妖精は消えてゆく。お前の想像の絵画性を再び私はうれしく思う。さて、夢に駆り立てられた尋問者として、次のことをお前に問うよう迫られている。すなわち、これまでに、［487］この騒がしい声をたてる時以上に活発な時のお前の幅広い北方人的想像力によって、偶然に来世とのつながりができて、声は別として、他のお前の補助をしてくれるような人物に大部分憑依されたかもしれないと感じたことがあったかということだ。答えるのは嫌かね！　お前の考えを聞くと戦慄するがね。考えてごらん！　お前の心から一方を取り去り、他方を信じてみなさい。次に私が口にする言葉はお前の答え次第だ。

―― ありがたいことに、僕も考えていますよ！　僕が考えようとしたのは、蚤がたかっているのを感じたと考えた時だけです。おそらくそうだったのでしょう。全くどうでもいいことなので、何とも言えないのです。一、二度、兄と、乗り合い馬車の御者のジェイク・ジョーンズとエディンバラに行った時や、隣人の家で、子供用は別として、園芸用着替え服を試着しようと思った時に、そういうことがありました。おそらくあなたもまた、これ以上にこうしたことの大部分を口にしないし、さらにあなたが同じ釜の飯を食った仲間であっても理解しないでしょうがね。言うならば、たまたま何回か僕は暗がりで考えながら、自分の馬鹿げた想像の中で、自分の生きる権利を自分の枠から出して拡大しようとしたのです。僕はビューリーズの店で、スコッチ半分とポタージュを味わいながら、そこにいる野獣たちのように、自分が中年化しているのを感じました。それゆえ神に誓いながら、今の自分は本来の自分ではないことを自分に言い聞かせ、大して恐怖心を抱かずに、誰の手も借りずに、本来の自分になろうとしていることがいかに適切なことかを認識しているのです。

―― ヤレヤレ、神の創造物君、これがお前のやり方かね。はじめに変身ありきか！　見かけと中身は違うものだ。声はヤコブの声と思ったのだが。模倣者であるお前はある時

はローマ【ROMA】であり、ある時はアモール【AMOR】【ヴィーナスのこと】なのだ。エッ、ミスター・トリックパット、つまり、歌とか戯言は別として、お前が私の率直な問いに答えるのを厭わなければ、我々の同情を集めることになるのだがね。

―― 神よ、この修道士を助けたまえ！　実際僕はあなたの厳しい問いに答えてもかまいません。でも、あなたが問わなかったならば、あなたにとっておそらく無意味であったのと同じように、今僕が答えたならば、それは倫理に反することでしょう。シェムも答えることはできないし、ハムも答えようとはしないでしょう。僕もその一人なのですよ。話を元に戻すことが僕のするべきことだから、話を元に戻しましょう。僕の名前を使ってあなたは僕を呼びます、リーランダーさん【チャールズ・リランドはアイルランドの漂泊民の隠語シェルタを発見した】。しかし、僕が隠れ場（シェルター）に閉じこもったら、あなたは僕のことが分からないでしょう。馬が後ろ向きに歩く時には、この馬はチャペリゾッドでは一番のダークホースなのです。最初僕のことが分かっても、二度目には分からなくなるでしょう。率直にいえば、僕はとらえどころのない人間なのです。愛と盗みの中に住むフライデーの子供なのです。

―― 我が子よ、次のことを知りなさい！　その答えの一部は、あの最初の嘘つきである憎悪すべき聖教会会議の書き物から採ったように思えるということだ。［488］それゆえ、お前は女王を敬い、彼女に従っているのだから、この聖教会会議の恥辱の内在が一人にのみかかわることなのか、二人で償うものなのか聞かせてくれ。どうか、最も簡潔な言い方で！

―― 親愛なる愛する兄弟ブルーノとノランは、平信徒の簿記係であり、豪華な建物のある聖ナッソー通りの外れに住む生涯結ばれた相棒だったのですが、2 週間前、イブセンとアヴェロエスを引き合いに出しながら、代わる代わるこのことについて説明していました。自分をノランと照らし合わせながら自分自身について語るブルーノは、不承不承にも大きな力によって、ノランのすべてを、自分と同等でありまた対立すると考えています。つまり、永久にノランによって対立関係に置かれているのと同じくらいに、ノランと永久に同等関係を保ちながら対峙していると考えていたのです。永遠に、永遠に、この力ある者たちは。そしてシェムも同じ状況にあるのです！

―― あのライオンの声以上に大きな彼らの声が大気中にこだまする。再びフィン・マクールのうなり声が聞こえるかもしれない。熊もライオンに行き着くのだ。しかし誰だろう。ライオンの声そのものだろうか。いや、お前は自ら進んでではなく、不承不承に、一つの口実として ―― お前は黙秘権を使うつもりか ―― 利己的な心をもたなくても単一の者には心を悩ませるくせに、積極的に複数の者には心を和ませようとするのか。兄弟よ、その魂のうちを明かせ！　兄弟よ、お前は死ぬ運命にあることを覚えておくがよい！

―― どうか僕の言うことを聞いて下さい。僕は郵便配達人に生まれついているとは夢にも思っていませんでした。ただ僕が言っているのは、追放されてどこかにいる僕の深く愛する者のことです。否定主義者の電信士である、この町にいる僕のアリバイ作りの兄のことですよ。名前は言わない方がいいでしょう。僕の困り者の兄のことです。裏側から教会を見たということで追放されたスケープゴートです。諸魂日にいつも散文と韻文で「イブ崇拝についてのむなしい書き物」を出しているのです。【その内容は、自分は】ハイ・ブラジル島出身の聖ブレンダンの遅れて出現した再来で、現世のクレア州の言葉を話し、電話番号は 0009 である。蒸気船に乗ってダブリンからヨーロッパ各地を転々とした。そこで終止符。今日飢え、また終止符、明日は遊びに興じる、終止符。凡庸な電信士として金を送るのは電信で。終止符【というものです】。尻につけなければならなかった白いつぎはぎで彼と見分けがつく、あの哀れなアリバイ作りの私生児 ―― あっちへ行け、この下司野郎 ―― をあなたはお忘れですか。どうやって、僕の困り者の死んだ兄は、アイルランドが植民地として拡充される前に昼食後スイスに行ったのか。何と接尾辞にコフやらイッチやらミニやらラティやらオプロスやらビルゲンスやらのつく外国人が好きなのに、アイルランド人の団結を唱える、人付き合いのいい電信士のために、一本の最上の酒で、ちょっとしたマリアに栄えあれを一緒にやりませんか。というのも彼は誤解されている愛国主義者ですので。彼の心はあのタラの館だったんです！　［489］でも彼が死んだと断じて、彼を悼む者がいればいいんですけどね。おごってくれるのを待っている者はもっと多いでしょうが。2 階で彼とセックスをした相手とか、彼の巣窟の同居者とか。彼のことは BBC も放映してくれるでしょう。終局を迎えている者に大いなる恩寵を。彼の魂に安らぎを！　彼が死者の中に入りますように！　我々の世界から離れ、彼岸の者となりますように。彼が処刑台を免れても、それでも死者の中に留まっているよう祈っています。僕はあなた方のことを悪くとっていましたがね。これ以上多くの悪漢は見たくはありませんが、繰り返させていただくと、タス通信社のような通信社を通して、大きな感謝の気持ちを込めながら、彼がオーストラリアの対蹠点やどこかで、僕の最も愛情を抱いている者と一緒に、口止め料を払いながら、安全に、呪われながら生きているかどうか、あるいはいなくなったかどうかを知りたいのですよ。さもなければ誰がこのような僕の愛する兄などの話を明るみに出しますか。この死んだ E・ノラン、業績はニュー・サウス・ウェールズから出ていますが、今の状況は尊ぶべきジェズイット教団から除外され、その職務から完全に外されているのです。そして彼のことを思い出すに、僕たちはカストールとポリュデウケース以上に仲のいい兄弟で、彼は絶対禁酒主義者なのに、思うに、うろつきながら、赤いニーガス【ワインに湯、砂糖、レモン

果汁、香料を加えた飲み物】を追い求めていました。僕が彼のことを恥じなければいけないのと同じくらいに、彼は僕のことを恥じなければいけないと思っています。卵の中の二つのぬるぬるした固まりのように、僕たちは同じ時代の中にいました。ダブリンのテレビを通してユダヤ語で僕たちが言ったように、僕は僕がもらったのと同じ人から名前をもらった彼に最も恩恵を受けているのです。過ぎ去った時を思うと、心は短く何回も揺れ動くのです。彼の足にはくたびれた靴があり、誰がこれを修繕するのか分かりません！　彼の手にはブーツがあります！　銅貨を私に一つか二つ恵んで下さいな、そうすればあなたは幸せになれると思いますよ！　以前から感謝の気持ちをもちながら、また確かに自己愛をもって、僕はこの話を心の中で面白いと思っていましたし、これからもそうでしょう。ここでは本当にあなた方の友人のままです。僕は学者でも何でもありませんが、アプリコットの菓子を食い、横顔からつまらない考えをもっていることが窺える、僕に似たあの男が大好きだったんです！　僕の兄！　僕はあなたのことをハーフブラザーと呼びます、というのも比較的素面で、気楽にしているあなたを見ていると、信仰と希望と貞節さをもった自然で陽気な僕の兄のことをはっきり思い出しますから。シドニーやアルバニーに大層愛された、あの団結したアイルランド人の一人 S.H. デヴィットのことを思い出すのですよ。

── お前がそれを歌うと学問になるね。自分一人で書いた相手へのあの手紙は、それまでに意図していたものには全くならなかったかね。

── この日の夜の日記になりました。この夜通しの童歌へと。

──オヤオヤ！　この無線の時代では、いかなる年老いた雄鶏もがらくたものをくちばしでほじくりだすことができる。［490］でもいったい何故彼はこんなに苦悶しているのか。相手を討ち果たし犠牲者とした勝者である彼は困惑していたのか。

── 全く確かに！　彼の車に道を譲ってください！　彼が二人の侍祭とともに本を声に出して読んでいた時に、乳母車が彼の脇腹に突っ込んできたのですよ。それ以来ずっと尻を蹴っ飛ばされる感覚が続いているのです。

── 紳士、淑女諸君、理想主義者は二重生活を送っているのだ！　しかし輝かしい兄弟の関係に関して、表面的な名前としてのノランというのは誰なのだ。

── ノラン氏はおそらく神からの授かり者氏でしょう。

── 分かった。人物にまつわる事柄を聞くことで、その人物は真の位置に置かれ始めるのだ。エウリカ！　女がもっている直接の目標を前にすれば、お前にとって彼はパトリックなのだ。分かった。乙女の名において。さて、ぜひともお前に尋ねたいことなのだが、そしてお前とお前の異種同一名者との間の問題として言おうと思うのだが、お前の優れた記憶力によって、この 2 分間の間ずっと、いびつな肩の上に金髪をのせているこの非人称代名詞的人物をお前はまさに調査するつもりなのか。そしてまたこの人物はあまりに信義に厚く、実際にダブリン市民で、お前と同じくらいの背丈で、薄茶色の頬髭をはやした、誰にも束縛されない真の真たる亡命者でもあるのか。彼のボスの脇腹をつつき、彼の口から答えを引き出せ。

── 聖バゴット通りをうろつく人間の 3 倍飲むスタウト飲みです。以前は勇ましい奴だったんですがね。最近僕は 4 シリング 6 ペンス出して、楽譜のように重いクリスマス【プレゼント】を家にもっていって奴を驚かしてやりました。祝福された里親の立場で、クリスマスの虹の架け橋として、その凝視した目に渡してやったのです。それなのに奴はむっつりした顔でお礼の義務を果たし、神が仕方なく大目に見た行動をすべて奴は僕に対してとったのです。奴があのようなことをしなければ僕はもっと楽しい気分なのですがね。彼女は奴に手紙を出し、僕が配達したのです。生まれ変わりのジェニー【『乞食のオペラ』の登場人物】はね！　トントン！　手紙ですよ、ブルーノさん！　トントン、トントン！　手紙ですよ、ノランさん！　こんな風にして僕たちは、トントントンの朝なのですよ。

── タラ【古代アイルランドの首都】から出てきたお前の田舎者が、本を書くことを心に期しているが、これはいい兆候ではないか。そうではないか。

── 本当のことを言えば、これはいい兆候ではないということの確かな兆候となっています。

── 本を書くことが、彼の心を食う雌豚【アイルランドのこと】を描くことを目的としたものだとしても、それが何だというのか。たとえこの豚が良質の豚としても。

── あなたの家の窓の下枠をその雌豚が食べたとしたら、あなたは雌豚とは言わないでしょう。

── この後、尻尾に笛をつけて他の鳥を脅えさせる雄牛、雄牛中の雄牛を所有しているかどうか、もしお前に尋ねたらお前は驚くかね。

── 驚きますね。

──［491］お前はシンディーやサンディーと一緒に、ゴリアテという名のダンスパーティーに出ていたのか。

── あなたは自分が言いたいことを僕にしゃべらせようとしていますね。僕は葬式に出ていたのですよ。ただただそれだけです。

── 兄弟の問題を解決する二つの方法がある。

── どちらも同じことに行き着くのですよ。

── ある物事は別のある物事の裏返しなのだ。キリスト教社会主義者の禿鷹どもが正統派のアーヴィング派のアヒルどもと戦い、打ちのめす時などね。確かに運は変化する。中年太りが若い考え方をしても、彼の精神は道徳的肥満化の傾向をもつ。私たちはコークの通称ねじれ通り【コークのパトリック通り、U 字形になっている】などその例のトップに位置づけることができる。このパトリック通りは、真ん中の湾曲部を除くなら、リジモアからブレンダン岬まで、

すべての方向において、1 マイルの間最もすばらしい並木道であろう。お前は恋人同士の密会についても話した。タタール人もアラブ人ももっているこの秘密が明らかにされることなく、どこかで【このことについて】人の名が話題に上ったのを聞いたのだが、それは誰だっただろう？それはマローレインだったろうか、デマッシュだったろうか。どちらについてでもいいからその結果を話してみよ。**お前がヴァン・ホンパーあるいはアベル・テレーゼ・ケインのことを聞いたことがある場合には。**

―― いいですか！　注意して下さい！　心して聞いて下さいね！

彼は下着を大邸宅の庭に落っことしてしまったのです。

そしてヨークの大僧正から濡れたシャツを借りなければならなかったのですよ。

―― ブロブディングナグ【『ガリバー旅行記』の中の巨人国】である HCE は散歩中だったのか。

―― リリパット【『ガリバー旅行記』の中の小人国】である ALP は草原にいたのです。

―― 突っ込め！　突っ込んで話せ！　早く！　速やかに！

―― アア、タラの鵞口瘡のこと、あの株の押し売りのことですね！　あの人でなしのはしご担ぎは、洗足木曜日【最後の晩餐とキリストが弟子たちの洗ったことを記念する木曜日】のために草原の平均気温を測っていただけだと言っていましたよ！　あのイガイ【貝の一種】男と、彼の筋肉ママ、ヤドリギママのことを知っていますか。僕の聖処女マリア、マミー、僕のママのことを！　彼は物寂しい路地が大好きです。あの双子の少女をものにした耳の不自由なエアウィッカー氏に対して、まさに祝いの言葉をかけてやりたくなりますよ。あの西欧かぶれは布団にくるまって、白人の戦争を嘆き、どうしたらよいかと思い悩むことで公平な立場にいたのですが、でもあの雷鳴轟く最初の仕事の日、あの無気力男はあの違法行為に飛び込んだのであり、レクリエーション用のズボンをはき、大胆なアイルランドの少年でもやらないような時に、【覗き見をしながら】バルト海の町々でよく見かける膝掛けをかけていたのです。

―― ［492］お前は彼奴のどんなことを知っているのか。茶黄色の髪をした、あの困った奴のことを。あの茶黄色の髪の困った男は、たいした人物ではないのかね。蓮のように大きなしっかりとした作りの彼の心の耳、バスの低音の声を変ロの音まで落とすために使った耳に向かって、1 分でもいいから尋ねてごらん。大いに笑われたのはあのことのためか、それから悩んでいるのはあのことのためかと。全般的なことはどうなのかと。

―― 月曜日も！　火曜日も！！　水曜日も！！！　木曜日も！！！！　金曜日も！！！！！　土曜日も！！！！！！　日曜日も、誤ったクレッシェンドです！！！！！！！

――神であり悪魔でもある彼は！犯罪へと転がっていったのだろうか。そしてあの愛らしいアンナ、彼の気品ある女神、ケルトの黎明、その彼女は女の尻に敷かれたロシア人の男の歌を、全曲通して彼に歌ってやったのか。私の美髪の持ち主は紅海のように荒々しい！　よろけながらもしっかり抱きとめ、抱き上げてくれるのなら、あなたを癒してあげよう！　エメラルドの母、我々のために祈れ、隣人よ！

―― 髪の毛を、赤毛を、黒みがかったカミツレ色に！塗りたくれ、塗りたくれ、遅れることなく！　さて、ゆっくりと効く毒を扱う者に何が影響を与えるのかについて、カルカッタの土牢に閉じ込められた、石のような人々が口にする今おっしゃったのと同じ言葉のことを考えたいと私は思っているのです。というのも、ザファニア・ホルウェル【カルカッタの土牢の囚人のリーダー】、H および、J.C.S が飲むような、彼の汚れた毒であるピルスビール 1 パイントが原因で、私の親愛なる尊敬すべき旦那様は監房に閉じ込められたからですわ。変人の薬屋で注文した品物を、私は担架のようなかごに乗せてもって行きました。私のいつも使っている現金払いの薬屋であり獣医でもあるこのシュレイガー・ダウリングから、注射器のような形の魅力ある通りであるオンブリラ通り 1001 番地に住む著名な耳鼻科医アクムド・ボランボラド、M.A.C.A. 博士のところへ、私の泥パックと一緒にもって行こうとしたのですわ。そこに行ったのも、深い畏敬の念を抱いている私の先祖から伝わってきた、私にとって決して損なわれることのない彼のスリッパを持って、お尻に虫が作った傷、いきり立ったオチンチンまで 7 ヤードもある彼の傷のために、私のもってきた液体、医療用の液体の効果がどれほどか知るためです。このお医者さんは私たちにとって最もお金のかかるもので、私はそのことを繰り返しカヴァナ・ドゥジャナラルに手紙で知らせています。私が監房に行った時、彼は乾いたむさ苦しい熱気の中で、背を丸めて座り、油絵のスティッカーのついたトリニダッドトバコ産のピルスナーを飲んでいました。相当な下痢状態で、特に果物は禁じられていました。そして彼の世俗的な司祭の話によると、一団の司祭が、大罪を犯した者たちの間をわたりながら、トマス・ムアのメロディーを歌って、彼に聖油を塗ろうとすることに、彼は私と同じくらいに不機嫌だったようです。そしてその後、過去にまつわる専売特許状を示された時、彼は意気消沈していました。価値が 1 ルピー程度の成熟した名声の持ち主の我が主人である閣下殿は、［493］シャツ姿で、パース・オライリーのバラードの載った、ヨーロッパの他国の日曜版の新聞に自分の写真が載っていると私に言いながら、もらい物だと彼の言う湯飲みから、日曜に飲む安酒の歓待用アペリチーフを、瞬き一つせずほんの一杯やりました。でもその後安楽椅子に座り、私の記念日ということで、両目蓋を同時にオウムのように開きながら、私に対して敬意を払ってくれました。マハラジャの妻としての私の横顔にすり寄り、最後にクリスマスの朝のように、私の口の中に心地よくプラムの実を入れてくれました。彼の赤ら顔の頬と

皮のむけた顎に非常に明るい希望が漂っていました。そして私が私の魅力ある人の【ズボンの】中に手を突っ込むと、彼は屹立したペニスを見せてくれただけでした。石の間でシュッと音を立てる蛇のようでした。それをあの時のように芸術庇護の王族の中でも最高のこの賢人は、単に思い出となるだけの押し殺したインド語の言葉を口にしながら、男らしく今も取り出しています。その言葉とは、アイルランドは七面鳥を食うためのラム酒を持った寄生虫の国だ、だから愛するリチアよ、ここはその邪悪な者たちのための場所だから、ここを去れ、というものでした。

―― この言葉は誰が誰に言ったものか。

―― 誰かです。誰にだかは記憶にありません。

―― すばらしい！　すばらしい上にすばらしい、すばらしい川の流れだ！　衣服をまとった月の下で、これ以上に真実が露になることはない。バイキングの王ソージルの、妻の鏡であるオタが、そのずんぐりした穴の開いたウールの肌着を下に落とした時、彼女は今日の女性貴族たちのお嬢様ぶりを発揮したのだ。扇を手にし、ひだ飾りをつけ、フランジパーヌ【ペストリーの一種】の香りを放つ、封建的な誇りをもった華やかさの中に打ち立てられたお嬢様ぶりを。この国の支配者が ―― この点ではエフィアルテス【海神ポセイドンの息子の一人】の右に出る者はいないが ―― 策略を練っている間に。我らの「人にあらざる者」【ユリシーズがサイクロプスをだました時に使った名前】がサイクロプスの喉をかき切った時に使った、単なる虚言という策略を練っている間に。さあ、どんどん問いたまえ。

―― 私たちの目と鼻を使って考えると、物事は真実でもあり、虚偽でもあるのです！　空しいものです！　空しいものですわ！

―― アイリーン【ALP を暗に指す】を神の恩寵を求める者の一人とせよ。というのも、父なき息子たちが彼女を汚したからだ。起きよ、立て！　言いたいことを口にせよ！

完璧な平安への架け橋を架けようとするのに、何故お前は好運に欠けるのか。装飾模様は虹となっているのに。海を治める君主の館の主である神は、力を込めてこう言われた、鷹のように飛べ、クイナのように叫べと。ALP がお前の名前なのだ。大きな声で語れ！

―― 私の心よ、私の母よ！　私の心よ、私は暗闇から抜け出て来ました！　彼らは私の心が分からないのです、オオ、親愛なる私の心よ！　私の心の暗闇が！ 私の魔法のような魅力が分からないのです！［494］親愛なる説教師氏よ、あなたの権威ある天文についての知識が聞けるとは何という驚きでしょう！　そう、懐かしき我が家には虹がかかっていました。すばらしい天空に、らくだがいらだっていた丘の上に、洪水のような光を放ちながら。虹色について話してください！　ルビー、緑柱石、かんらん石、翡翠、サファイア、碧玉、青金石の各色合い。

―― 虹だと！　エトナ山やアトス山のような地上の呼び名を使って、天上で叫び声をあげようというのか。モーゼに愛を込めて、どうか火山のようなお前の興奮を鎮めてくれ！

―― 興奮しているのは私ではなくて、あなたの方ですわ、質問攻め屋さん！

―― 蛇座が地平線の上に見える。か弱き女性が土星という悪魔の輪で遮られている。若い魚のアドニスと老いたパルテノペー【セイレーンの一人】が北の空で美しい。地球と火星と水星が天空の縁の下から昇ってくる。一方、アークトゥルス【牛飼い座で最も輝かしい星】とアナトリアとヴェスパー【宵の明星】とメゼンブリアは、東西南北の自分たちの館で泣いている。

―― アペプとウナチェットよ【エジプトの蛇の神および女神】！　聖なる蛇よ、私の後についてこい、チャーリー、エヴァは自分のペースでおしゃべりをしていた。ウラル山脈の如き HCE は行動中だ。そして彼は火山のような感情の爆発で彼女を震え上がらせるだろう！　このノロノロと進んでいる、騒動を詰め込んだ者はどこにいても品がない。この太っちょの長老はレモングラスと井草の中を通り、ベルシャザルの速記学校のチルドレン・オブ・メアリー・クラスの前に、ブラマンジェとメイプルシロップを使ってカモフラージュするかのようにこっそり近づいている！　ズボンをはくように定められていることがこの学校の欠点だ。彼女の王族が奴隷へと至るように、彼のディックがダビデを目指すように、贅沢に暮らす者がギュゲス【リディアの富める王】のところへ赴くように、この踏み車【牢で罰として用いる】を課せられ、小石を投げられる男はノロノロと地上を進んでいる。そして彼女は派手なボンネットをかぶり、おしゃべりに夢中。すばらしい女だこと！　蛇よ、立て！　ダン・マグロー【『ダン・マグローの射殺』という詩の中の人物】という名前に万歳三唱、そしてヴィヴァ、ヴィヴァ！

この巨大な太陽【この手紙の受取り手である HCE】は高貴です。でも彼を取り囲んでいるあの白色矮星たちのうちの主たるものはどれなのでしょうか。私が彼の 7 番目の星になっていたかもしれないとあなたはお思いですか。彼は私の肘にキスしてくれるでしょう。彼の年齢をどう思うか、とあなたがおっしゃるなら、それが何なの、と私は言います。これから彼の罪を打ち明け、一層顔を赤らめることにしましょう。不品行にもぶらぶら暮らしている衆愚たちによる、鼻くそのような名誉毀損を戒めてやりましょう。彼らにはダイナマイトがお似合いです。ある地方に住む 30 歳を超えた二人の女が短い手紙をよこしたのです。一人は副総督の館に住むシンデレラ嬢で、もう一人は未亡人のアマゾン夫人のところで賄い婦をしています。鎖を噛みながら吠えたける犬のように、乞食に向かって怒鳴り散らすあなたの旦那さんに警告なさったらどうでしょうか、とか、どうかお答えください（レスポンデ・シル・ヴ・プレ）、などと言うのです。［495］前に言ったサリーは、浮浪者とかマフィアとかサリバンと関係をもつバラックの住民なのですが、匿名の手紙や、パー

シー・フレンチ【アイルランドのソングライター】風の口汚いバラードを書いています。彼はマグラス一家の殺し屋で、深い海を飲むような大酒飲みにふさわしく、安っぽいパワービールの臭いをプンプンさせています。彼は根性を出して熊に向かっていけるほどの人物ではありません。狙った女が女でない子供なら、HCE はその娘を遮二無二手に入れようとするだろうと、彼は私に言っていました！　さようなら、サリーさん！　もし彼らが担架の上の彼の鼻をちょん切ったなら、それはそれでもっともなことです。残りかす的人物の好色ぶりに乾杯！　ごた混ぜの施し物できれいなオレンジ色になった【彼がもらった】売春婦のハンケチ、戦いの教会【現世の悪と戦う教会】からもらった凍った黒ずんだポテトに乾杯！　リンチ兄弟と同僚と友人と仲間が、T.C. キングとゴルウェイの首長とともに、星明かりの力に清められた彼を絞首刑に処そうとする時には、L.B.W. ヘンプよ、それ、絞め殺してやれ！と、土地同盟のテロリスト、キャプテン・ムーンライトが声をかけますよ。私は彼を私の藁布団の中に入れて、聖パウロのためにその埋葬の場所で私自身が転がるであろうように、一晩中彼を引っ張り回してやります。私とパース・オライリーは、司教代理のベッドの中で彼を笑い者にしてやります！　早くしな！と私は言う。私が髪の毛も見えないくらいに隠れていると、彼は私のことをオボーン川のババアと呼ぶでしょうが、図体が大きい無骨者であるため、私は彼のことを変人の王様と呼んでやります。ひっぱたくぞ！と彼は言っていましたがね。変人というのも、短時間の睡眠で事足りる生活の喜びをもってこう言うことができてうれしいのですが、あの高貴な助平野郎が、手頃な 1 ポンド金貨を、勝手気ままにあの正真正銘の見せびらかしの女の子たち、エリザベット・ガニング、マリエッタ・ガニング H_2O 両者の、バラの城のもとに置いたサクランボの入った小枝細工の果物かごの中だけでなく、数ペニー入っているスロットマシーンの中にまで600年間投げ入れてやったからなのです。ウェールズ人の使うラテン語的フランス語で書くような、オニールはモリー女王のパンティーを見た、という標語をつけて。そして大層崇められている彫刻には、我らの裁判長が最近とったと言われている行為の際の、彫像に必要な、膝頭から 5 インチ上の、完璧な男の部分が描かれています。V.I.C.5.6　もしあなたが私をお放しにならないのなら、立ち止まって私を支援して下さい。お分かりでしょう！　ご連絡待っています。あなたの妻のアン、私はアン、アンより。

―― マリア嬢、お前は「芸術と文学の女性守護者」として、少しずつ我々を誘導したがっているね。でも残念ながら、この女性守護者という名前をもっていても、気まぐれとワインのせいでお前は間違ったことを言っている。

―― ［496］生きている者たちがもつ偏見には嘆かわしいものがあります！

―― とんま卿と男もどきの淑女か！　まぬけ叔父と雄ロバ叔母か！　確かにあの老いたペテン師は、借金と罪の宣告で、丘でも港でも相手にされず排斥されていた。私の重々承知していることだが、旗を飾った艦隊にさえそうされていた。無料のパンフレットすべてに悪く書かれ、紙くずからもつばを吐きかけられていた。壁に座ったハンプティー・ダンプティーのよう。大衆のための沈黙した美術品といったところか。デーン人の島や小教区の修道院長も、女島のおてんば娘も、スイスの 4 つの州のどの州の住民も、全世界の原動力となる人々も、地上全体のすべての男女も、エアウィッカー氏の、この種植商・小児愛男の隣や近くに行こうとはしないだろう。彼の気体でできたバンガローにも近づかないだろう。我が救いは主からのみ来る（悲しいことだ）、さもなくば、その後何の訳もヘチマもなく、糞の山からやってくるだろう。

―― すべての耳が活動したのです。パース・オライリー同様老いたエアウィッカーもびっくりしたのです。

―― 説明せよ！

―― この点は何もかも存じています。あの子豚たちが、困った時に行くところ【トイレ】に行きたがったのです。そしてこの子豚がおしっこをしました。そして幸運なしかめ面氏たちがずっと覗き見ごっこをしていたのです。私の人もそこにいたのです。そこに私の人も。惨めなことです。寂しいことです。

―― 家族に娘をもつ厳格なる者たちの父よ！　いや、しかし、今、そして、彼女のどうでもいい話を転機として、しばらくの間この大げさなトラウマに満ちた話から話題を変えて、お前の中に存在する彼 ―― 儲けの不安定な図々しい商人、血塗られた代父、ドロドロのミルク野郎 ―― に共感できるかどうかということに急いで戻ろう。というのも、彼女アンナ・リヴィアについてはもう十分すぎるほど語ったからだ。そういうことで、彼から我々は離れることはできないのだから、この重要人物の話に再び戻ろう。飲んだくれてからというもの、彼は泣き上戸になったのか。ある時彼は成金趣味らしきことをやらなかったか。彼はキリスト教に基づいて鳩を使いに出したが、鳩は囚人の下着をくちばしにくわえて帰ってきた。その後腐肉のようなカラスを使いに送ったが、警察が未だ彼を追いかけている。支配されている国の探索者や保護施設のおせっかい屋が群がっている。正しき者たちに語れ！　ゆっくりと！　彼は悩んではいけない。目覚めなければいけない。現在であるあらゆる過去に未来があるならば、フィネガンを知らなかった者など誰がいるであろうか、そしてフィネガンの徹夜祭に誰が、どの人物が、何人来るであろうか！　［497］誇りをもって言え！　彼を生み出した者たちは、彼を使い果たす者たちではないのか。曲がった葬列の正しい進行の先導という、彼にまつわる事実についてのお前の考察は。熱を込めて語れ！

―― 神を求める男の元へ。彼らは密かに「神の子羊の高貴なる祭典」【フィネガンの、すなわち HCE の通夜】の楽隊演奏に到着していなかっただろうか。改革主義者であり

汎アイルランド主義者であるこの者たちは。ひび割れた土地のやせた不作の年が続いた後。スカープのハンターとホース岬のハンターは。偉大な神のミュージカルに。緋色の僧服をまとい修行を積んだ考え方の煮え切らないペテロたちは。教皇の特使や諸々の高位聖職者たちは。老いも若きも総勢 1132 名で。皆内輪の者、特別な従者、子供たちを連れて。ラスガーや、ラサンガや、ラウンタウンや、ラッシュから。アメリカ大通りや、アジア広場や、アフリカ街道や、ヨーロッパ街から。ノースウォールやサウスウォールから。ヴィーコ通りや、メスピル通りや、ロック通りや、ソレント通りから。彼の繁栄が人を引きつける力をもっているので。彼の感染症を恐れながらも。彼の小屋の骨組みの中の待合室へと。強力な磁場をもった山に鉄の鉱脈が群れをなして素早く集まるように。彼が銃を持っていやしないかと恐れながら、しかし離れているのも怖がって。メリオンの住民も、ダンドラムの住民も、ルーカンの住民も、アシュタウスの住民も、バタシー公園にいる者も、クラムリンの住民も、フィバスバラの住民も、キャブラの住民も、フィングラスの住民も、バリマンの住民も、レイハニーの住民も、クロンターフの乞食も。彼らの積み荷の中で沈思黙考し、最も重要な務めを果たすために。彼の船を前にして。左右それぞれ 12 個の石碑が置かれている。「国王、万歳！」とか、「のどの渇きで悪寒がする！」とか、「死んでもいいから！」とか、「酔っぱらってもいいから！」といった言葉を口にしながら。営業許可をとってある彼の楽しげな酒場の中に。そして弾薬庫のような玄関の、弾薬庫のような壁のそばでは、「輸出会社、オスティーとその仲間」が再会している。彼の 566 回目の誕生日を祝うために。貢ぎ物の受取り手である絶賛の的偉大なる翁パース・オライリー、ダンカー派【ドイツバプティスト同胞教会】の宴を催しているコルク抜きの名手リンスキーとワイン飲みのピョートル、靴の王たち、インドゴムの裁定者たち、ペーズリー織りのショールを着た者たち、イスラムの司教たち、スルタナ干しぶどう業者たち、スペインのマラガ積み出しのアーモンド業者たち、一列に並んだジャム業者のサヒブたち、ペチコートをまとった風変わりな王女たち、ナイトクラブの女王、クラダリング【2 本の手で王冠をのせた心臓を持つ形の指環】製作の指導者たち、二人のサロメたち、二人の太ったインドの君主と一緒のハーファ・ハムやハンザス・カーン【当時のペルシャ大使】、ドイツの雄弁なカイザー、―― この人物は魅惑的な小さな鈴を身につけて飾り、これ見よがしに鳴らしていた。［498］また現在の最善の暴君である J.B. ダンロップがいた。そして偉ぶったフランスワインの管財人、テューダー王朝風の総賭け競馬参加者、いつものカウンターに向かうシザラウィッチ競馬通い、ラバの背中に横座りするような姿勢で樫の木の階段を上って行く聖レジェ競馬通い、―― この人物は馬の前に荷馬車をつけた前後逆の運搬人のように、後ろ向きになり、上る方向に足を蹴って上っていた。そして気楽に彼の真の国歌「オイコラ、尻尾を立てて走らんか」を歌っていた。また王座が置かれた誰もいない謁見の間のように広いこのオラフ王【11 世紀のノルウェー王】のブドウ酒貯蔵室は、オレンジ公やベターズ国会議員の館をすっぽり包み込むほどの広さで、ドルイド教信者の哲学博士、古代アイルランドの裁判官のような司教、王子のような永久司祭、アガペマニー【19 世紀のイギリスの自由恋愛者の集団】の伝道者、インドのドグラ族の教会区司祭、アルスターの王、マンスターの伝令官、ダブリンの旗持ち、アスローンの従者、女帝キャサリン、HCE 自身、エプロン状祭服を身に着け司教の座にある、彼の聖人である双子の息子、頭にダイヤモンドの冠をはめた、偉大なる彼の娘アダマンタヤ・リューボコフスカヤで一杯だった。これらの人物は皆厄介なアイルランド人で、インドのパンジャブ人、ドグラ族、タミール人、グジャラート人などの親密な仲間たちのところからやってきたのであり、ここにくる前に泥炭地のビールやライ麦のビールばかりでなく、フレッシュなスタウトや上質のウィスキーを、彼の夫人が作った天使のパンをそれに浸しながらたんまりと流し込んできたのだった。（ケネディーの店で彼女は私のために生パンをこね、その後焼いてくれたのだ。小型ロールパンを！）そして一同テーブルのまわりで、洪水のような照明のスイッチを元に戻し、アーサー王がつけるような特徴あるバラをつけた、一般世間に上半身を見せているあの哀れな老いた王、アイルランドの最後の王ロデリック・オコナーである彼の英雄性を崇高なものにし保護するために、彼のまわりに集まった人々を神格化しながら、社交を暖め、意思疎通を図っていた。このことはヴァーノン家にブライアン・ボルの使っていた剣があるのと同じくらい本当のことである。10 本ほどの蠟燭がまわりに輪状に一つずつ並べられ、彼の罪も許されているなか、彼の娘たちも列席していた。彼は高みに横たわり、あらゆる次元の中に横たわっていた。彼は宮廷の服装をし、市長のつける首鎖をつけ、イタリアの金物屋において様々な臭いが蓄積したような、花の香りのような彼を包む衣類の芳香をまわりに漂わせ、髪にはヒースの花を群がらせていた。また彼の放つ分光のスペクトラルは、昼間時の蠟燭の光のような彼の生活をあざ笑っていた。ブヨブヨに膨らみ栄光に包まれた彼は、バッグプディングがその専制君主の元に集められ、ボタンがしっかりとかけられ、子供たち、天使たち、貧乏人たち、冒険心あふれる者たち、のらくら者たち、支配者たち、旗手たち、古代人たちが嘆き悲しんでいるなか、そして彼の所持品が、売却のため査定者の査定が行なわれた後展示されているなか、誰にも相手にされないまま、清められ、防腐処理を施され、保存されたのだが、［499］このように彼の存在が無となったことは、彼の命が永遠のものとなった後、彼の肉体の復活が判明するまで、皆の最大の驚愕の対象となったのだった。

―― 我々全員に楽天的な気分と祝宴場を与えたまえ！彼の死が原因となり聖なる舞踏が繰り広げられるであろ

う。お望みとあれば次のような挽歌を聞かせよう。死よ、死よ！　恥辱に満ちた人間よ！　アア、死の舞踏！　アア、死よ、死よ、死よ！　不運なことに！　アア、死よ！　アア、死よ！　死よ！　死よ！　アア、死よ！　死よ！　悲しみの塚よ！　ワルハラの城よ！　死者である君よ！　死んでしまった君よ！　死よ！　死よ！　死よ！　死よ！　死よ！　死よ！　ああ、見よ。死を！　死を！　死を！　死を！　主よ。永遠の安息を彼に与えたまえ！　永遠の光を彼に与えたまえ！　（プシッチ！）【くしゃみか？】

── しかしフィネガンの徹夜祭には非常に熱い思いがあった。この王は死んでしまった。この王に末永い命を！

── 神が王である御身を救いますように！　知られざる生活を送るこの巨匠の身を！

── 脂肪質の王よ、神は親切にもあなたのためにお働き下さるでしょう！　今朝僕は午前中に 4 回、昼食時に 2、3 回、後になって 3 回祈りました。でもあなたは魂を悪魔に与えたのでしょうか、フィンよ、ファイムよ、ファドよ。

── 救いようのない、お目にかかることのない嘘つきめ！　お前の余分な足を大事にしながら、今いるここに腰を下ろし続けるつもりか。口に商売用の舌をはめ込み、ヒンズー語でわめき散らしながら、市場の豚のように、同じ文句を繰り返してそうし続けるつもりか、惨めな奴め、言ってみろ。

── 今あなたのいるこの古い塚に腰を下ろし続けるつもりですよ、不機嫌な方。生きている限り、手織りの服を着て素朴に、睡眠をたっぷりとって。私の心の中にある、これまでずっと自覚してきた罪の中に埋もれているすべてを伴いながら。押しつぶされたオリーブのこの塚を滅茶苦茶にすることができなかったら、彼を呪ってやりますがね。

── オリーブだって！　彼の存在は大地なのかもしれない。あれはうめき声だったのかね、それとも私は峡谷のバッグパイプが破壊的な戦闘を伝えるのを耳にしたのかね。気をつけていたまえ！

── 僕の魂は悲しみに暮れ、死の中に入ろうとさえしています。僕は愛の囚人！　心から血を流している！　垂れた頭！　開いた手！　傷ついた足！　水を！　水を！　水を！　一本の木が中に . . .!

── 神の怒りと雷の火か。迷える世界はぐるぐる回っているのか。この物静かなささめきは何か。教えてくれ。

── 奴は何者なのか。奴は誰なのか。何者なのか。要するに、誰なのか。奴は何者なのか。奴は何者なのか。

［500］── 小太鼓の音がする！　地面に耳を当てよ。死んだ巨人が生き返った！　奴らは英国議会軍を演じている。ゲール族よ！　飛びかかれ！　中に誰がいるのだ。

── 黒い異邦人です【デーン人】。救援のために突っ走っています！

── ザワザワ、ザワザワ。

── フィッツジェラルドの戦いの叫び声だ！　クロムウェルを勝利に！

── 奴らを突き刺し、深手を負わせ、撃ち殺し、その姿を見物してやろう。

── ザワザワ、ザワザワ。

── アア、寡婦と孤児だ、あれは自由民だ！　永遠のアイルランド人野郎だ！　ランカスター家の者たちよ、立て！

── ノロジカの叫び声です。牡鹿です。足跡が続いている。角笛が鳴るなか、猟犬が駆けている。我々を派遣し、安寧を！　爵位を！　爵位を！

── キリストよ、『アイリッシュ・タイムズ』の中に！　キリストよ、『アイリッシュ・インデペンデンス』の上に！　キリストよ、『フリーマンズ・ジャーナル』の社長を支えよ！　キリストよ、『デイリー・エクスプレス』に光を与えよ！

── くずどもを打て。皆殺しだ！　娘を犯せ！　法王を絞め殺せ！

── お聞き下さい！　不機嫌な父よ！　我々の父よ！　役に立って頂けないのでしょうか！

── ザワザワ、ザワザワ。

── 売られたのだ！　私は売られたのだ！　ブリンアブライド！　私の最初に愛した人！　私の妹！　ブリンアブライド、さようなら！　ブリンアブライド！　私は売られたのだ！

── 愛するピペット！　私たちは！私たちはどうなるの！　私は！　私はどうなるの！

── 行け！　行け！　あきらめろ、先へ！　進め！

── 私はね！　私の心は本物です。本物の！イゾルデよ。ピペット。私の宝！

── ザワザワ、ザワザワ。

── ブリンアブライド、私の人間的価値に賭けて！　ブリンアブライド！

── 私の宝物、私の価値とは？

── ザワザワ。

── ブリンアブライド、私の値段だ。売る時は私の値段を手にしろ！

── ザワザワ。

── ピペット！　ピペット、お金には代えられないピペット！

── ザワザワ、ザワザワ。

── アア！　私の涙を慰めてくれる母よ！　私のために信仰に励みたまえ！　あなたの息子を見守りたまえ！

── ザワザワ、ザワザワ。

── サア、もうじき目標に到達だ。中に入って異国をかすめ取れ！　ヤア！

── ［501］ザワザワ、ザワザワ。

── ヤア、称号は何か。君の称号を言ってくれ。

── アブライド！

── ヤアヤア！　ここはボリマカレット【ベルファストの一地区】だ！　間違って来たのか。合っているのか。

―― 称号だ！　称号は何だ。
沈黙

（注）

『フィネガンズ・ウェイク』の原典は、James Joyce, *Finnegans Wake* (New York: Viking Press, 1947) を使用した。本文中の［ ］内の数字は、*Finnegans Wake* の原典のページを表す。【 】内の日本語は、該当個所の内容を筆者なりに解説したものである。（ ）内の日本語は、原典の（ ）内を訳したものである。参考文献としては、以下の書を使用した。

1. Campbell, Joseph and Henry Morton Robinson. *A Skeleton Key to Finnegans Wake*. rpt. New York: Viking Press, 1944.
2. Rose, Danis and John O'Hanlon. *Understanding Finnegans Wake: A Guide to the Narrative of James Joyce's Masterpiece*. New York: Garland Publishing, 1982.
3. McHugh, Roland. *Annotations to Finnegans Wake*. Revised edn. Baltimore and London: John Hopkins University Press, 1991.
4. Glasheen, Adaline. *A Third Census of Finnegans Wake*. Evanston: Northwestern University Press, 1963.
5. Mink, Louis O. *A Finnegans Wake Gazetteer.* Bloomington and London: Indiana University Press, 1978.
6. 柳瀬尚紀訳、『フィネガンズ・ウェイク』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、河出書房新社、1991 年
7. 宮田恭子訳、『抄訳、フィネガンズ・ウェイク』集英社、2004 年
8. Slepon, Raphael, ed. *The Finnegans Wake Extensible Elucidation Treasury (FWEET),* Websit

『フィネガンズ・ウェイク』第 3 部第 3 章の概要（1）

大島　由紀夫

（東京海洋大学大学院海洋工学系海事システム工学部門）

要旨：　ジェイムズ・ジョイス著『フィネガンズ・ウェイク』の第 3 部第 3 章の 474 ページ 1 行目から 501 ページ 6 行目までを訳出した。逐語的に訳した所もあるが、内容をくみとりながらその主意を表した所もあり、「概要」といった題名にした。この訳出した箇所では、ヨーンとなったショーンに対する、4 人の博士の尋問の模様が記されてある。

キーワード：　フィネガンズ・ウェイク、第 3 部第 3 章、概要